

四四五 比日熱甚し。坐して書を読む。余、其の甚だ堪へ難きを知る。

比日熱甚、坐而讀書、余知其甚難堪也、

【訳】近ごろは大変暑い。座って書物を読んでいると、それが大変耐えがたいことだ。

四四六 然り而して熱に苦しみ寒に怯え、屢課業を怠る。作輟常ならず、因循歳を送る。倏忽の頃、少壯既に過ぎ、老大且つ及ぶ。而して此の生將に何の為す所にして以つて世に立たんとするや。

然而苦熱怯寒、屢怠課業、作輟不常、因循送歳、倏忽之頃、少壯既過、老大且及、而此生將何所爲而以立於世哉、

【訳】そのようなことで熱気に苦しみ、寒気におびえて、しばしば日課の行うべき事を怠ることがある。仕事をやめたりすることもよくある。こんなにしてずると歳をとっている。たちまちのうちに若い頃は過ぎ、老いてきた。このようなことで、私の一生は何をして世に立とうとしているのか。

四四七 学ぶ者は固く此の志を執り、寒の為に怯えず熱の為に沮まれず、埋頭研鑽、孳孳矻矻、必ず得る所あるを以つて期と為す。

學者固執此志、不爲寒怯、不爲熱沮、埋頭研鑽、孳孳矻々、必以有所得爲期、

【訳】学ぶ者は、学問をしようとする志をしつかり持つて、寒さにおびえることなく、暑さに負けることなく、一生懸命集中して研鑽し、こつこつと日々努め励み、必ず得るところがあることを期待してやっいていくのだ。

四四八 得る所深く且つ厚ければ、則ち異日以つて天下に名あるべし。稍浅ければ則ち僅かに以つて郷閭に見はるに足る。而れども、庸惰昏憤、昼間夜裏、唯閑をこれ偷み、遊戲雜作して、己を誤り人を誤るものは、復た其の死して聞こ

ゆるなく、朽ちて糞土^{ふんど}と為るを怪しむなきのみ。

所得深且厚、則異日可^レ以名^二於天下、稍淺則僅足^一以見^二於鄉閭、而庸惰昏憤、晝間夜裏、惟閑之偷、遊戲雜作、誤^レ己誤^レ人者、莫^レ復怪^二其死而無^レ聞、朽爲糞土而已、

【訳】得るところが深くかつ厚ければ、将来天下に名をなすことができるだろう。得るところがやや浅ければ、郷里くらいでは名を残すことができるだろう。しかし、昼も夜もただ暇を盗んでは遊び、いろんなことに手を出して自分を誤り、他人をも誤らせてしまう者は、死んでも噂されることもなく、ただ腐って汚れた土になることは疑う余地のないことだ。

四四九 是の故に志あるの士は、慮^{おもんばか}らざるべからず。力めざるべからず。苦しまざるべからず。苦を厭^{いと}ひて力めざるものは、極めて其の志なきを見る。七月十七日、書して以つて諸生に示す。

是故有^レ志之士、不可不慮、不可不力、不可不苦、厭苦而不力者、極見^二其無^レ志矣。 七月十七日、書以示^二諸生

【訳】これ故に、学問をしようとする志を持つものは、思慮深くなければならない、また努力もしなければならない、そして、苦勞もしなければならない。苦勞をすることを嫌い、努力しないものは、学問をしようとする志がないということだ。

四五〇 夫の蚓^{みみず}は上槁壤^{こうじやう}を食ひ、下黄泉^{こうせん}を飲む。黄泉槁壤^{こうせんこうじやう}、往^ゆきて在らざる所なし。

夫蚓者上食^二槁壤、下飲^二黄泉、黄泉槁壤、無^レ所^二往而不^レ在也、

【訳】あのミミズは、地上ではかわいた土を食べ、地中では地下水を飲む。どこに行っても、自分が住めないことはない。

四五一 凡そ生を天地の間に稟^うくるものは、資用の急、飲食より急なるはなし。而して飲食の富、蚓^{みみず}より富めるはなし。則ち蚓^{みみず}の生を為す、從容遊樂^{しやうようゆうらく}、又宜し

く蚓みみずの生より樂しきはなかるべし。

凡稟_レ生於天地間_一者、資用之急、莫_レ急於飲食、而飲食之富、莫_レ富於蚓、則蚓爲_レ生、從容遊樂、又宜莫_レ樂於蚓之生_二也、

【訳】この世に生を受けている全てのものは、生きて行く上で一番必要なものは、飲食をおいて他にない。飲食の豊富さでいうとミミズより豊富に持っているものは他にはないと言える。だから、ミミズは生きるのに、のんびりと遊んで楽しんでゐる。そしてまた、ミミズの生き方ほど氣楽なものはないと言える。

四五二 然れども時に盛夏炎熱しやの炙しやのごときあれば、則ち蚓みみず、復た土中に居る能はず。流離顛連りゆうりてんれん、悶悩困憊もんのおうこんばい、以つて死命の免れ難きに至る。蓋けだし亦かくのごときものあり。

然而時_二有_レ盛夏炎熱如_レ炙、則_レ蚓不能_レ復居_一土中、流離顛連、悶悩困憊、以至_二於死命之難_レ免、蓋亦有_二如_レ此者_一、

【訳】しかしながら、真夏の焼け付くような暑さの中では、ミミズも土の中にいることができない。居どころを失って、さまよい、ひっくり返り、悶え苦しみ疲れ切つて、死を免れることは難しい。まさしく、樂に生きられるように見えてもこのようなこともあるのだ。

四五三 今夫それ人は得るを憂ひ失ふを憂ふ務めて己おのれの謀はかりごとを為し、又子孫の計を為すものは、汲きゆう汲きゆうとして多く資財を積むに過ぎざるのみ。而れども禍患かかんの至るは、未だ必ずしも此こゝにあらざんばあらず。而して夫かの蚓みみずの遇あふ所に類するもの、固もとより亦多し。

今夫人之憂_二得憂失、務爲_レ己謀、又爲_レ子孫計_一者、不過_二汲々多積資財_一而已、而禍患之至、未_レ必不_レ在此、而類_二夫蚓之所遇者_一、固亦多矣、

【訳】人は財産を得ようと悩み、それを失うと悩む。自分と子孫のために財産を得ようとあくせくして財産を積むだけのことはする。しかし、災難が起こるのは、必ずしも、こんなことにあるのではない。ミミズが食べ物に困らなくても死んでしまうように、こ

れに似たことは多いのだ。

四五四 是の故に人の、世に処するに、自ら其の身を保ち、天と人にと応ずるゆゑのもの、内は則ち其の徳を慎まざるべからず。外は則ち其の道を尽くさざるべからず。徒其の富を恃みて愒にすべからざるなり。丑七月二十五日、録して書生に示す。

是故人之處世、所以自保其身而應於天與人者、内則不可不慎其徳也、外則不可不盡其道也、不可徒恃其富而愒於災也、丑七月廿五日、録示書生、

【訳】だから人がこの世に生きるにあたっては、自ら身をよく保っていく。天と人によく対応していくために、自己の内にあつては徳を積んでいかなければならない。また外に向けでは、すべてにおいて人の道を進まねばならない。いたずらに富をあてにして災難をあなどつてはいけない。

四五五 凡そ小文を作るには、尤も其の曲折多きを尚び、其の転換多きを尚ぶ。然らざれば則ち意味索然たるを免れず。

凡作小文、尤尚其多曲折、尚其多轉換。不然則不免意味索然、

【訳】だいたいにおいて、小文を作るには変化の多いことが大事で、転換の多いことが重要である。そうでないと、心惹かれるものがなく面白みのないものになってしまう。

四五六 これを小屋を作るに譬ふれば、屋、小なりといへども、必ず区画するに方あり、其の接賓の所あるを要し、其の読書の所あるを要し、其の庖爨、雑事を治むる所あるを要す。然らざれば則ち家たるを成さず。

又これを掌大の地を就すに譬ふれば、細泉を引き、小石を運び、矮樹雑卉、經營して苑池を作る。苟しくも能く其の巧を施せば、則ち咫尺の間といへども、居然として湖山千里の趣あり。

譬之作小屋、屋雖小、必區畫有方、要其有接賓處、要其有讀書處、要其有

庖爨治_二櫟事_一處不_レ然則不_レ成爲家、

又譬_二之就_二掌大之地、引_二細泉、運_二小石、矮樹雜卉、經營作_二苑池、苟能施_二其巧、則雖_二咫尺間、而居然有_二湖山千里之趣、

【訳】これを小さな家を作ることに例えれば、家が小さくても、必ず間取りの決まりがある。応接間が必要であり、読書する部屋が必要であり、台所や雑事をするところが必要である。そうでなければ、家とは言えない。

また、小さな土地を庭園に仕上げることに例えれば、水を引き、小石を運び、小さい木やいろいろな草花を植え、工夫して庭と池を作る。かりにも、うまく工夫をこらせば、狭い土地であっても、居ながらにして広々とした趣ができてくる。

四五七 作者は小文に於いても、敢_あへて輕易に筆を下さず。必ず心力を尽くし、極めて商量を費やす。是の故に文成りて千古に伝ふるに足る。韓文公の「獲麟解」・「雜說」・「董邵南・廖道士を送る諸序」及び柳子厚の「永州諸遊記」等のことき、皆是れなり。 丑八月初七日、録して諸生に示す。

作者於_二小文、不_二敢輕易下_レ筆、必盡心力、極費_二商量、是故文成而足傳_二千古、如_レ韓文公獲麟解・雜說・送_二董邵南・廖道士_一諸序、及柳子厚永州諸遊記等、皆是也。

丑八月初七日、録示_二諸生、

【訳】文を作る人は小文においても、敢えて簡単に筆を進めず、必ず精神力を集中させて、この由来を思考する。こうすることにより文ができ、その文は長く伝わっていく。韓文公の「獲麟解」・「雜說」・「董邵南・廖道士を送る諸序」。それから、柳子厚の「永州諸遊記」等のように皆この通りである。 丑八月初七日、録して諸生に示す。